

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

イタリアの家族論と家族概念 (特集 家と家族)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇田川, 妙子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005858

イタリアの家族論と家族概念

宇田川妙子

はじめに

現在、家族は、世界的な規模で人々の耳目を集める社会的な問題の一つとなっている。家族をめぐる急激な変化は、世界のいたるところで報告されつつあり、イタリアもその例外ではない^①。ことに先進国随一と言われる出生率の低さは、世界的に有名である。

こうした状況の中、イタリアの家族という問題について、しかも限られた紙面で論ずることは難しい。さらに近年では、これまで一般的に「イタリアの家族」と言われてきたものにも重大な問題が含まれていることが明らかになってきた。すなわち、イタリアの家族が、その言説においても実態においても、常に「他者」の視線によって強い影響を受けてきたという、言わばコロニアリズム問題である。家族という事象が、実は自生的なもの

ではなく、さまざまな次元の権力関係の中で醸成されてきたということは、イタリアに限らず現在盛んに論じられているが、特にイタリアの場合は、後述のようにコロニアルな視線によって、より複雑かつ深刻な浸食を受けていた。ゆえにその視線を解きほぐしていくことは、家族をめぐる変化が激しい今だからこそ、その変化を適切に見極めて有効な家族論を展開していくためにも必要な作業であるに違いない。

しかしながら筆者は、こうしたイタリア家族論の見直しの動向もいまだ不十分であり、実は極めて重要な問題が見逃されたままであると考える。というのも、確かに近年、従来の家族像はコロニアリズム批判という視点から大幅に修正されてきたが、その主な関心はその形態や機能に集中し、その一方で、彼らの家族という概念や意味に関しては本格的な考察がなされることは少なかったからである。もちろん、いたずらにイタリアの家族の概念的な特徴にこだわるならば、それは容易にコロニアリズムに回帰し

てしまう。しかし逆にこの問題にまったく無関心であれば、逆に研究者側が用いる家族概念が絶対化されてしまう危険性があるだろう。つまり、いくら家族像の修正を行ったとしても、研究者側の家族概念を相対化することがなければ、その修正は決して研究者の基準枠を出ず、ゆえにイタリアの家族を十全に把握することは不可能ではないかという疑念が出てくるのである。それは、別の形でのコロニアリズムである。

したがって本稿では、近年の家族論再考の業績を評価しつつも、さらに家族という概念に注目することによって、今後のイタリア家族論の新たな展開の可能性を探っていくことにしたい。そしてその際、筆者自身が一九八六年以降調査を続けているローマ近郊の一町²での家族の事例を主な資料として用いていくが、筆者はこの資料を「イタリア家族」の典型として用いるつもりはないということも付け加えておく。本稿の主旨はあくまでも、現在のイタリア家族論に家族概念に関する考察を導入することの意義と必要性を具体的に明らかにすることにある。もちろん、この問題は「イタリア家族」という範疇の問題と決して無縁ではないが、この点については稿を改めて詳しく論ずることにしたい。

では、以上のような問題意識に基づき、まずは、イタリア家族およびその研究史を簡単に振り返りながら、これまでのイタリア家族論の問題点を明らかにすることから議論を始めていくことにしよう。

イタリアの家族と「他者」の視線

イタリアの家族というと、一般的に大家族で、内部の結束が非常に堅い

というイメージがすぐに浮かぶ。このイメージがどのように形成されてきたのかは、実はとても興味深いテーマだが、たとえば、アメリカのマフィア映画に代表されるようなマスメディアによる影響力も無視できない。しかしこのイメージは、そうした大衆的な次元のことばかりではない。

学問の分野でも、イタリア社会の最大の特徴を家族に見出し、彼らの家族が極めて強固で機能性の高い集団であるという指摘は、これまでも数多くなされてきた。中でも注目すべきは、アメリカの文化人類学者バンフイルドによる「無道德家族主義 amoral familism」という造語である。彼は一九五八年に南イタリア・ルカニア地方の一村落での調査に基づいて著書『或る後進社会の道德的基盤』を出版し、その中で、彼らの行動の特徴が「家族の短期的、物質的な利益追求」にあると結論付け、それを「無道德家族主義」という言葉で表現した。この言葉は、その後多くの論争を呼び、多くの批判も浴びてきたが、現在でもしばしば復活している(Putnam 1993)。

また、こうしたイタリアの家族に対するイメージは、イタリア外部からの一方的な見解ではなく、イタリア人自身の見方でもあることにも注目したい。彼らはしばしば「家族が一番、教会は二番、哀れな国家は三番目」と言いながら、家族が自分たちの生活にとって非常に重要な要素であると自ら表明している。筆者もローマ近郊の町で調査をしていた時、多くの人から、自分たちの家族に対する思いは他の国や社会に比べても特別だという意見を聞いた。また、イタリアでは小規模な企業組織の比率が高いと言われているが、それらは家族的な紐帯を基盤にしていることが多く、経済活動においても家族は重要な役割を果たしている³。そして近年イタリアでも家族のあり方は急速に変化しているが、他のヨーロッパ諸国に比べると、

離婚率や婚姻率などのさまざまな点でその動きは遅く、したがってイタリアではいまだに家族に対するこだわりが強いと評価されることも多い。すなわち、イタリア社会における家族とは、現在でも人々の生活全体の中で、最も機能的で、高く価値付けられている組織であると思えることができるのである。

しかしながら、こうした彼らの家族の実態や実感にも、実は「他者」の視線がまったく関与していないとは言えない。たとえば、戦後のイタリアの国家施策のひとつに、他の諸国に比較してあまりにも手厚いと言われてきた年金制度があるが、この施策の背景には、家族を社会の重要かつ機能性の高い集団と位置付けて利用しようとした意図があったと言われる。家族と国家との繋がりに関しては、ファシズム期の家族政策が最もよく知られているが、その前後にも国家による家族への介入は多く見られ、近年、そうした趣旨に基づく研究が進められつつある⁴⁾。またイタリアの場合、教会による影響も無視できない。そして、さらにこうした政治的な言説には「無道徳家族主義」など、事実上イタリア外部によって作られた言葉も混じり込んでいた。バンフィールドの著書の題名に象徴的に表れているように、家族あるいは家族主義とは、しばしば社会の後進性や不安定性を含意し、それがイタリア社会の自己認識と重複して用いられる傾向があったからである。

確かに家族および家族主義を前近代と結び付ける論法は、決してイタリアに限らない。しかしイタリアの場合、他のヨーロッパ諸国に比べて国家形成が遅れ、近代化がなかなか進まないという事情がこの論法に拍車をかけていたと考えられる。つまりそうした位置付けの中で近代

化を目指そうとしたイタリア自身が、家族という言説を、その後進性の原因・象徴として(時には逆にイタリア独自の良き伝統の象徴として)より積極的に利用したというわけである。たとえば最近、「南部問題」と言われる南イタリア社会の問題が、実はイタリア国家自らが近代国家としての資格を得るためにその後進性を南部地域に押し付けた結果の産物であることが明らかにされつつあるが、その際にも家族に関する言説は重要な役割を果たしていた(Schneider ed. 1998)。イタリアで最も家族主義的なのは南イタリアであり、それゆえに社会的な発展が遅々としているという論法である。そもそもイタリアでバンフィールドの議論が注目されたのも、そうした南北関係の図式を学術的に裏付けけるものと見なされたからだと考えられるし、事実、彼の著書に刺激されたピナ(Pinna 1971)らの同時期のイタリア人自身による研究の多くも南部開発計画などと結び付いており、前記のような政治的な意図が組み込まれていた(Mcloni 1997)。

そして、このように彼らの家族の機能性や価値が、近代化を急ぐイタリア国家などとの関連の中で強調・再編されてきたという経緯は、人々の意識にも大きな影響を与えていると考えられるだろう。先の格言にみられるように、彼らは家族に対するこだわりを表明する際、同時にその対照として国家の頼りなさ、国家に対する不信感をしばしば口にしている。ここには、彼ら自身が家族という言説を、国家との係わりで認識し作り上げている姿を読み取ることができる。また、彼らが自らの家族の絆の強さを誇らしげに語るのは、ことに他の国や文化という「他者」との比較を意識した文脈である場合が多い。イタリアの家族とは、彼ら自身の実感によるものでさえも、「他者」の視線によって強い影響を受けてきたと言わざるを得ないの

である。

イタリア家族研究の近年の展開

さてこうしてみると、今後のイタリア家族研究においては、前記のようなコロナルな様相をさらに明らかにしていくとともに、従来の議論についても、特に研究者側のコロナルな姿勢に注意した批判的な見直しが必要であるに違いない。

実際、これまでの行論からも十分に推察されるように、従来のイタリア家族論の多くは背後にコロナルな視線を抱えていた。そして、その姿勢は既述のようにイタリア人研究者にも見られたが、外部の研究者に顕著だったことは言うまでもない。その代表例が既述の「無道徳家族主義」の議論だが、他にもラスレットらのケンブリッジ・グループによる「南欧型家族」(Wall ed. 1983)という「悪名」高き仮説もあった。

彼らのヨーロッパ家族史研究における最大の貢献とは、よく知られているように、特に英国では近代化・工業化以前にすでに核家族が一般的であったことを歴史統計学的に示した点にある。この議論の背景には、前近代と大家族を安易に結び付けてきたそれまでの研究傾向に対する鋭い批判があった。ところが、ことイタリアに関するかぎり、彼らは十分な資料分析を欠いたまま「多核家族」優勢という類型化を行い、ここには皮肉にも、彼ら自身が批判したはずの、大家族を前近代性・後進性に結び付けようとする図式を見出すことができるのである。イタリアは、実際にはかなり以前から地域によって核家族世帯の傾向が強いと指摘されていた。にもかかわ

らず(実はバンフィールドの注目した家族も核家族であった)そうした見解が十分に浸透せず、その矛盾に大した顧慮が払われなかったのは、明らかに英米の研究者に根深く内在するコロナルな姿勢のせいである。

しかし現在では、すでに冒頭でも触れたように、こうした思い込みは着実に訂正されつつある。特にその転機となったバルバリの『同じ屋根の下で…イタリア家族の十五〜二十世紀における変化』(一九八四年出版)以降、多くのイタリア人研究者は、積極的に前記のようなアングロサクソン系の家族論の偏向を告発し、イタリア内部の家族事象が職業、階層、地域などのさまざまな要因によって多様で複雑であることを具体的に提示してきた。カーツァーらの歴史的な分析の蓄積もそうした議論の深まりを助けている。ここではその詳細を述べる余裕はないが、今やイタリアの家族をある一つの形態で考えることは無意味となっている。また、サラチェノらをはじめとして、家族をイタリア国家体制との関連から再考していこうとする研究者も増えてきた。そして「無道徳家族主義」論に関しては、九〇年代になると、その歴史的な再定義を含めた本格的な見直しが矢継ぎ早に企画されるようになり(Meloni ed. 1977, Cerase 1992 など)、特に画一的なイメージに陥りがちだった南イタリアの家族に対する見方も大きく変化した。

とするならばイタリアの家族論は、ようやくポスト・コロナルな段階に入ったと言えるかもしれない。ところが、これですべての問題が解決されたわけではなく、そこにはある重要な問題が見逃されていると筆者は考える。

実際、近年のイタリア家族研究をもう一度振り返ってみると、その関心の多くは、家族の形態・構成・機能などという、言わば家族それ自体に注

がれていることに気付く。これは確かに、従来の家族研究があまりにもコロナアルな偏見に満ちていたため、そのイメージの訂正が急がれた結果であろう。しかし、彼らの家族を的確に理解していくためには、ただ家族それ自体に注目するだけでは足りず、それが彼らの社会全体の中でどう位置付けられているのか、そして、そこにどんな意味が付与され、いかに再生産されているのか、という視点も必要になってくるに違いない。しかし、こうした言わば彼らの家族概念そのものに関する本格的な検討は、今のところまだ十分ではないのである。

たとえば、前記のような再考の歩みにもかかわらず、依然としてイタリア社会のあり方を彼らの家族の特徴と結び付けようとする議論は後を断たないという問題がある。もちろん、今や、その背後にイタリア社会の後進性という前提があらさまに存在することはなくなった。しかし、従来のコロナアルかつ否定的な意味合いの強かった「家族主義」という表現を嫌う一方で、新たに「開放的家族主義」などの言葉を作り出すなど、むしろ、その重要性を積極的に評価し直そうとする議論も出ている(Gribaudi 1997)。この状況は、確かに一面では、コロナアル批判がいまだ定着していない過渡的な現象にすぎないのかもしれない。しかし、この種の議論の根強さに注目するならば、それは、研究者の多くが、イタリアの家族にはコロナアルリズムには還元できない独特の「重要性」があると見なしている証であるとも言えるだろう。とはいえ現在の研究段階では、その「重要性」の中心について十分な解明がなされているわけでもない。家族の重要性とは、家族それ自体の問題ではなく、その社会全体における位置付けや意味の中から生ずるものである。しかしながら、そうした視点は、既述のように現

在のイタリア家族研究には不足している。このため、イタリアの家族の重要性という言説を(それがすべてコロナアルな虚構か否かという問いも含めて)的確に捉えきれず、今のところ結局は、従来のコロナアルリズムに回帰してしまう危険性さえ払拭できていないと考えられるのである。

したがって、これらの問題点を整理しながら、近年のイタリア家族研究をさらに発展させていくためには、やはり、彼らの家族概念という問題へと本格的に踏み込んでいく必要がある。彼らの家族という事象には、これまでの研究が踏襲してきた家族概念では把握しきれない問題がまだ多く残されていることは否定できない。

そして最近では、こうした問題意識に立つ研究もすでに少しずつ出始めてきた。たとえば、彼らの家族という事象を彼らの生活戦略の一つとして位置付けたり(Goddard 1996)、より広い親族や友人たちとの人間関係と結び付けて考察しようとしたり(Meloni ed. 1997)、あるいは、家族そのものを何世代かにわたるプロセスと見なそうとする(Pickin 1995)研究は、一見、互いに異なる問題意識に立っているように見えるが、そこには、戦略やプロセスなどの新たな言葉を使って、家族をこれまでのように実体的な一つの社会単位のごとく概念化することを避けようとする共通の姿勢が存在する。ゆえに本稿でも、以降は、特にこの問題に焦点を当てていくことにしたい。一口でイタリアの家族概念の検討とはいっても、そこには非常に多くの複雑な問題が含まれており、その全容を一足飛びに明らかにしていくことは不可能である。しかしその中でも、分析者自身が抱えていた実体的な家族概念に対する批判という切り口は、かなりの有効性をもつと思われる。一般的に家族とは、一つの社会単位のごとく捉えられがちだが、少なくとも

もイタリアの家族研究においては、この一般的な前提自体を疑念に伏す必要があり、そうすることによって初めて、彼らの家族をより柔軟な枠組で捉え直すことができると考えられるからである。では、筆者の調査した町での具体例を積極的に用いながら、今後のイタリア家族研究の可能性に向けた議論へと移っていくことにしよう。

R町の家族

先にも指摘したように、これまでの研究では、その一義的な関心は、家族それ自体に置かれていた。たとえば、バンフィールドやラスレットらの議論も、その最終的な家族像には食い違いがあつたとはいえ、ともに家族を十全な一組織体として分析していた点には変わりなかった。そしてその後、確かに家族を画一的・固定的に捉えることはなくなり、その多様性や動態へと関心に移り、さらには農業経営形態や耕地形態などの他の社会組織との関連も考察されるようになったが、やはり主眼は家族の形態・構成・機能の解明にあつた。家族は依然として、ある明確な組織体であると見なされていたのである。

もちろん、家族研究が家族を研究対象とするかぎり、こうした姿勢は当然のことと言われるかもしれない。筆者も、ローマ近郊の一町(以下R町と仮称)で調査を始めた時、まずは彼らの家族のあり方に強い印象を受け、同様の視点からの考察を試みたことがある。R町では、すでに別稿(宇田川一九八九)でも述べたとおり、日曜、祝日ごとに、婚姻などによって分かれて住んでいる子供たちが、親のもとに集まって昼食を共にするという習慣

が広く見られる。彼ら自身も、そうした共食の範囲を自分の家族として意識しており、筆者の目には、この拡大家族的な共食の範囲こそが、彼らの家族として浮かび上がったからである。ここでもう一度、別稿でも取り上げた当時七十歳代半ばの未亡人A(以下、年齢などについては特別な断りのない場合は調査時の一九八六年を想定)の事例を簡単に振り返ってみよう。

Aは、夫を亡くして以来すでに二十年間独り暮らしを続けていた女性であるが、やはり彼女の家でも、日曜日になると、すでに結婚して別々の住居を構えている四人の子供たちが、それぞれの配偶者や子供を連れて集まってきた。この会食は、当時すでに結婚していたAの孫一人が夫とともに加わると、総勢二十名以上になることもあつた。ただし、子供たちにとっては、配偶者側の親との共食もしなければならぬ。このためA宅の昼食会への参加は、実際には隔週ごとになっていたが、日曜日に訪問できない週には、その前日の土曜日の夕方にA宅を訪れ、Aと夕食を共にすることも多かった。ここからは、食事を共にするということが、彼らの家族の絆にとつていかに重要なことかをうかがうことができる。

また、この昼食会には子供や孫以外の者も含まれていた。その内の二人は、彼女の夫方の姪にあたる姉妹であり、彼女たちはすでに両親を亡くし、ともに独身であるためか、日曜日になるとAの家で昼食を共にすることを習慣にしていた。彼女たちには確かにA以外にも叔父や叔母はいるが、Aは彼女たちが幼い頃から最も付き合ひの深かった近親であるという。さらにAとは何ら親族関係のない四十歳代前半の女性も、日曜日には子供とともにA宅にやってきた。彼女は、幼い頃の父親の失踪と母親の自殺、および自らの未婚での出産という事情ゆえに、今や親族との付き合いがほとん

どなくなっている女性である。しかし、そうした彼女の苦境に何くれとなく世話を焼いたのが、近所に住んでいたA夫婦であった。以来、彼女はAと家族同然の付き合いをしてきているという。

さて、以上がAの共食範囲の構成である。もちろん時には他の近親や客が加わることもあったが、大抵の日曜日には、このうちの十数人がA宅(時には長女や次女の家)に集まってきた。互いに料理を持ち寄ってくる場合でも、午前十時頃には三々五々やってきた女性たちが、お喋りをしながら共同で昼食の準備に取りかかり、一時過ぎに賑やかな会食が始まる。そして昼食が終わると、彼らはお喋りやトランプに興じたり、友達の家を訪問したり、あるいは逆に、昼食には来られなかった子供たちや友達がやってきて皆でコーヒーを飲みながら過ごし、結局、夕食も一緒にとった後、帰宅は夜更け過ぎになるというのが通例であった。彼らにとつては、日曜日は昼食時だけでなく、一日中互いに密接な接触を行っていると言ったほうがよいかもしれない。

そして、さらにこの範囲では、ただ食事を共にしているだけでなく、日常的にも頻繁な接触と相互扶助が行われていた。たとえば、子供たちは、特にR町に住んでいる長女と長男をはじめとして、他の日でも仕事帰りや買物の途中にAの家にしょっちゅう立ち寄っていたし、電話でも頻繁に連絡を取りあっていた。子供のみならず孫たちも、特別な用事もないのに頻繁にAに会いにくる様子に、筆者は少なからず驚いた記憶がある。しかも、こうした接触は親子間に限らず、この共食範囲に含まれている者同士では当たり前であり、子供たちも(姪やもう一人の女性も含めて)、同じ町内であればほぼ毎日のように互いの家を訪問をしあっていた。また彼らは、

この関係を通して、職探しや家屋の増改築などのさまざまな問題に対処していた。この範囲内の誰かに何らかの問題が起きると、彼らは真っ先に駆けつけてさまざまな手助けをしようとするし、自分たちだけで解決することができなければ、それぞれの友人・知人たちのネットワークを総動員して解決策を探ろうとした。そうした援助は、互いに当然のことと期待されてもいた。ゆえにこの共食の範囲とは、彼らの生活全般において極めて大きな機能を果たしており、共食とはむしろ、そうした関係のあり方を象徴的に示す装置であると言ったほうがよいだろう。そして、Aはこの範囲こそが自分の家族であると認識していたのである。

さて、こうした家族のあり方は、すでに述べたようにAの事例に限らず、R町ではよく見られるものである。しかも、R町には他に目立った社会組織が見当たらないこともあって、筆者はかつてこの範囲を「共食単位」という言葉で表現し、この点こそを彼らの家族の特徴として論じたことがある。もちろん現在でも、その見解すべてが否定されるべきだとは思わない。しかしながら、そうした考察と叙述が、彼らの家族のあり方をあまりにも単位的・実体的なものとして印象づけ過ぎていることも確かだろう。というのも実は、彼らの家族には、むしろ非単位的な特徴が強いとも言えるからである。そしてその特徴は、彼らが「家族」を表現する際に用いるミエイという語群に最も端的に浮かび上がってくる。

ミエイとしての家族

もちろん、家族にあたるイタリア語とは、*Famiglia*である。

ところが面白いことに、少なくともR町の日常生活では、この言葉が使われることは極めて少なく、家族は大抵、所有代名詞の複数形によって表現されている。すなわち「私の家族」とは、多くの場合、*la mia famiglia*ではなくミエイ・ニス(私のもの)となり、実はAも、前記のような共食範囲を後者で指し示していた。ゆえに彼らの家族とは、通常はこのミエイ(この語は人称によって変化するが、以降は「ミエイ」でその語群を代表させる)として認識されていると言ったほうが適切であり、とするならば研究者も、彼らの家族をこの語群に沿って考察し直す必要があるに違いない。

実際、このミエイには興味深い用法がいくつか見出される。その一つは、この語には文法上は複数人称形(私たちのもの/あなたたちのもの/彼らのもの)が存在するものの、家族を意味する場合は常に単数人称形(私のもの/あなたのもの/彼または彼女のもの)で使われるという点である。

このことは、彼らが家族を常に個人を中心に把握していることを示唆している。たとえば「あなたの家族(*il suo*)は元気ですか」という質問は、R町ではしばしば挨拶代わりになされているが、この言葉には大抵、当該者の親・子・祖父母・孫・叔父叔母などという、個人を中心とする近親のネットワークが想定されている。しかも、このネットワークの範囲・外縁には明確な規定がないため、一般的には前記のような近親を指示するとはいえず、個々具体的にはAの事例のように濃淡がみられる。すなわち、自分が実際に親しく付きあっている近親たちがミエイなのである。その結果、親子・夫婦・兄弟の間でも互いのミエイは少しずつずれることが多く、たとえば、Aの長男に「あなたの家族(*i tuoi*)には誰が含まれるか」と尋ねると、そこにはAのそれとは無関係な者が何人か加わっていた。その者たち

とは、長男の次女の婚約者の両親であったが、日曜日には互いの家で昼食をとるという習慣が始まっていたからである。

したがって、前述の共食範囲という彼らの家族認識も、このミエイという観点から見直してみると、実は個人中心的に構成されていることに気付くだろう。この範囲は、すでに述べたように、外からは一見、明確な外縁をもった持続的な集団のように見える。実際、今年筆者がR町を訪れた時、彼らはAを二年前に亡くしていたにもかかわらず、ほぼ同じ顔触れで昼食会を続けていた。ところがそこには、やはり若干の異動があった。たとえば三女は、かつてから夫側の親兄弟との関係が強かったが、現在では、この共食の場にさえ顔を出すことが稀になり、夫方の両親と日曜日を過ごすことが多くなっていた。逆に、新たに頻繁に加わるようになってきたのは、長女の息子の妻の両親であった。このように彼らは、確かに前記の範囲内で最も頻繁に共食をしている。しかし、各人はこの範囲外にも(頻度に差はあれ)食事を共にする者をそれぞれに有しており、その相手や頻度が時とともに変化することによって、全体としての共食範囲にも異動が生じてくるのである。とするならば、彼らの共食範囲とは、決して排他的なものではなく、その集団性に一義的な価値が置かれているとは言えないだろう。むしろ、各自にとって最も意味のある共食範囲とは、あくまでも自分を中心に誰と食事をしているかという指標のもとに把握されるものであり、一方、前記のような範囲とは、そうした個々の共食関係の結節点として対外的に表面化したものに過ぎないと考えられるのである。

さてこうしてみると、彼らの家族とは、一義的には各自の近親関係のネットワークであって、それを集団的な組織体と見なすことは、彼らの(少な

くともミエイとしての「家族認識とはずれているということが浮かび上がってくるに違いない。しかしながら、彼らの家族認識には、後者の意識がまったく欠落しているわけでもなく、その場合には、興味深いことに、実はファミリアという言葉がことさらに使われている。

この語は、既述のように確かに日常的にはあまり使用されていないものの、たとえばR町の人々は、先のAの共食範囲をしばしば「Aのファミリア famiglia di A」とも呼んでいた。もちろん、Aの家族に対しては「suoi」というミエイ語群で指示する方が多い。しかし「Aのファミリア」という表現は、この「suoi」と決して同義ではなく、そこには大抵、彼女の家族がある種の政治的な力を持っているという意味合いが含まれていた。Aは若い頃から教会と強い繋がりをもっており、それゆえ町内でも一目置かれてきた人物である。このため彼女の家族は、町の人々からは、たんなる家族ではなく政治的な機能を持つ集団としても見なされていた。また、この他にもR町でしばしば「何某のファミリア」という表現がなされていたのは、政治家の家族や、親子・兄弟で長年羊飼いを続けている家族、商店を共同経営している家族などの場合であった。つまりファミリアとは、その家族が、政治・経済など、何らかの目立った性格や機能性をもつものとして、社会の中で集団的に認識されていたり、またはそう表現したい際に用いられているのである。ゆえにそれは、外部の視点による家族像であるとも言える。彼らは自分の家族に対しても時々「私のファミリア」という表現を使うことがあるが、大抵は、自分の家族を他者に紹介したり自慢したりするという、他者の視線をことさらに意識している文脈においてである。

とするならば、彼らの家族事象には、ミエイとファミリアという二つの

側面があるともできるだろう。それは、簡単に類型化してしまえば、各自が自分を中心に把握している近親関係のネットワークとしての家族意識と、対外的に表面化した機能的な組織体としての家族という二側面である。しかし、彼らの生活にとってより基本的な意味をもっているのは、やはり前者であるということも、もう一度確認しておきたい。

たとえば彼らは、ミエイには誰もが常日頃から関心を寄せている一方で、ファミリアに対してはそうではない。先述のAの家族の事例についても、確かにA自身は、この共食範囲の集団性にこだわっており、ファミリアとしての家族イメージに対しても意識的だったと思われる。しかし、たとえば彼女の姪たちにとっては、この共食範囲はあくまでも彼女たちのミエイ意識の表出であった。もちろん彼女たちは、この範囲での付き合いを極めて重視していたが、それが「Aのファミリア」という集団性に対する関心や、あるいは自らのファミリアを作り出そうとする関心にはつながっていなかった。この差には、A個人の政治に対する関心の強さが関与していると考えられる。一方、姪たちにはそうした関心はほとんどなかった。すなわち、イタリア社会において、彼らが日頃から重視している家族とは、基本的にミエイという言葉で表現されているものであって、ファミリアとは、そこに他の文脈や意図が加味された時にのみ問題となる組織なのである。それゆえ後者には、正確には「家族」という語よりも、家族的な政治組織、家族的な経営組織などという表現を当てたほうが適切かもしれない。

また、このように彼らの家族事象を複層的に見直してみるならば、特にイタリア国家統一以降「他者」の視線によって強化されたというイタリアの家族像とは、まさにファミリアの具体的な一例として考えることもでき

るだろう。すでに述べたように、この時期イタリアの家族は、国家体制や経済機構と連動しながら、かつてないほどの機能性を付与されて、ことさらに実体化されてきた。その経過は、言い替えればイタリア家族の「ファミリア化」として形容することもできるかもしれない。

そしてこのことから、これまでの研究は、そうした歴史を経たイタリア家族を対象としてきたがゆえに、必然的に(そして無意識のうちに)ファミリアの側面のみに焦点を当ててきたと指摘することもできる。実際、すでに何度か繰り返ししてきたように、従来の研究の第一の関心は、家族の形態や機能などという明確な組織体としての家族であったが、これは、前述のファミリアという言葉によって指示されている家族のイメージにそのまま当てはまる。また、研究者の家族に対する見方が、そもそも外部者のものでしかなかったということも、こうした単位的な家族観を助長したと言えるだろう。しかし、これまでの行論からも分かるとおり、ファミリアとしての家族は、いかに機能的で社会内で目立つ組織であったとしても、彼らの家族事象の一部に過ぎない。そして、前述のような言わばファミリア化の流れの中でミエイ意識にも当然変化はあっただろうが、そうした動態も含めて彼らの家族事象を包括的に理解していくためには、やはりミエイという側面を含めた考察が必要になってくるのである。特に近年、イタリア家族は再び大きく変化しつづけると言われている。とするならば今度こそ、そうした変化をただ表面的に捉えるだけでなく、彼ら自身の意識に沿って把握していくためにも、我々は単位的な家族概念に捕らわれ過ぎてきた視点から早急に脱却すべきではないだろうか。

おわりに

さて、以上本稿は、近年のイタリア家族論におけるコロニアリズム批判の動向をさらに一歩押し進めていくために、これまでの研究(コロニアリズム批判のそれも含めて)に内在していた単位的な家族観を批判し、彼らの家族事象には実は、その概念では把握できない側面があるということを指摘してきた。確かに前者の家族観も、彼らの家族意識の中ではファミリアという語で表現されているが、彼らの日常生活において彼ら自身が重視している家族とは、基本的にミエイ語群で表現されていると考えられる。むしろこのミエイが重要だからこそ、そこに既述のようなさまざまな機能が付着してさまざまなファミリアが表面化しているとも言えるだろう。いずれにせよ、これまでのイタリア家族研究が、このミエイの側面を見落としてきたのは事実であり、ゆえに今後の研究の行方は、それをいかに考察していくことができるかにかかっているに違いない。

したがって、本稿では紙面の都合上、ミエイそのものについての考察については触れることはできなかったが、最後にこの問題についても若干付言しておきたい。

すでに述べたようにミエイとは、各自を中心にネットワーク的に広がる近親関係であると見なすことができる。とするならば、それはあくまでも彼らの生活の中における社会関係の一つとして、他の友人関係などの係わりと比較から、その意味を探っていく必要があるに違いない。つまり、彼らにとって近親関係とは何か、という問いである。そしてこうしてみると、

このミエイにはある興味深い特徴があることに気付く。

たとえば、R町で筆者は、「ミエイには誰が含まれるか」という質問を多くの人にしていく途中、しばしばミエイに自分の配偶者を含めないという回答に出くわした。もちろんその場合も、筆者が念を押すと大抵は後から付け加えたため、うっかり忘却してしまっただけという見方も成り立つ。しかし、親子や祖父母・孫に当たる人物に関してはそうした忘却はなかったし、さらには筆者の念押しに対して「彼は（ミエイというよりは）夫だ」という返答をして、ミエイと配偶者の微妙な関係について言及した者もいた。配偶者はミエイから排除されているわけではないが、彼らがそこに何らかの違和感を感じていることは確かである^⑥。

このことから、彼らのミエイ意識の基盤を構成する近親関係とは、婚姻関係（あるいは性関係）と対照されるところの親族関係、すなわち、典型的には血縁関係として捉えられていると考えることができるだろう。もちろん、Aの事例にあるように、実際のミエイには姻戚や非血縁者も含まれている。しかしその場合でも、Aの姪たちや非血縁の女性たちが、Aの子供たちなどと洗礼親などの関係を密に結んでおり、彼らの間は言わば擬制

親族の間柄になっていることは注目に値する。彼らは、互いに血縁として振る舞っていると見なすことができるのである。

したがって、以上の考察はいまだ途上だが、こうした彼らの親族関係の意味をさらに探っていくためには、それが彼らの生活全体の中で、どんな文脈で、いかなる行為とともに、どう解釈されながら展開されているのかについて、婚姻や友人関係などの他の社会関係との係わりや差異も考慮にいれながら、より丹念な叙述と考察を重ねていく必要があるに違いない。そして、とするならばイタリアの家族研究とは、今やむしろ家族という言葉を離れて、それを作り上げてきた個々の関係やその概念に関する考察へと積極的に移行すべきであろう。実際、そもそも家族という言葉自体が、イタリアに限らず一般的に近代になって普及し、社会組織としての重要性も高まってきたということは、近年の「近代家族」論の中で明らかになってきている。つまり、家族というカテゴリー化そのものが一つのイデオロギーであることが顕わになりつつある現在、イタリアの家族研究においても、むしろ家族を越えた展開こそが求められているのではないだろうか。

注

(1) 現在のイタリア家族の変化の概要については、Barbagli & Saraceno eds. (1997) や Zanatta (1997) など（を参照のこと）。

(2) 筆者の調査地の概要については、宇田川 (1989) を参照のこと。

(3) 特に「イタリアの奇跡」と言われたイタリアの経済成長を支えた中部イタリアの事例が有名。たとえば、Putnam (1993) や Ginsborg (1994) を参照のこと。

(4) たとえば Saraceno の業績の他にも、Manoukian (1988) などを参照のこと。

(5) 実はイタリアの家族概念の再検討については、すでに文化人類学の分野で、ある程度の議論が蓄積されている。しかしながら、そこには人類学的な論争の文脈が深く関与しているので、紙面の都合上、今回の考察では直接扱わないことにする。その議論の概要については、宇田川 (1989) や Douglass (1980) を参照のこと。

(6) この時、ミエイではなくファミリアという語を使った場合には、配偶者が必ず含まれることは面白い。ファミリアの概念は、夫婦関係を内包するものとして考えられるわけだが、とするならば、その後には、夫婦と親子関係からなる「近代家族」のイデオロギーが関与していると推察することもできるかもしれない。ファミリアとは、イタリア社会にあつては、近代的な生活スタイルの導入と共に普及したとも考えられるのである。

- Banfield, E. 1958 *The moral basis of a backward society*, Blackwell.
- Barbagli, M. 1984 *Sotto lo stesso tetto. Mutamenti della famiglia in Italia dal XV al XX secolo*, Il Mulino.
- Barbagli, M. & D. Kertzer 1992 *Storia della famiglia italiana 1750-1950*, Il Mulino.
- Barbagli, M. & C. Saraceno eds. 1997 *Lo stato delle famiglie in Italia*, Il Mulino.
- Cerase, F. P. 1992 *Dopo il familismo, cosa?* Franco-Angeli.
- Douglass, W. A. 1980 "The south Italian family: a critique" *Journal of Family History* vol. 5.
- Ginsborg, P. 1994 "Familismo" in P. Ginsborg ed. *Stato dell'Italia*, Il Saggiatore-Bruno Mondadori.
- Goddard, V. A. 1996 *Gender, family and work in Naples*, Berg.
- Gribaudi, G. 1997 "famiglie e familismo", in Barbagli, M. & C. Saraceno eds. *Lo stato delle famiglie in Italia*, Il Mulino.
- Kertzer, D. I., Hogan, D. P. & M. Marcolin, 1989 *Family, political economy, and demographic change: the transformation of life in Casalecchio, Italy, 1861-1921*, Univ. of Wisconsin Press.
- Manoukian, A. 1988 "la famiglia dei contadini" in P. Melograni ed. *La famiglia italiana dall'ottocento a oggi*, Laterza.
- Meloni, B. 1997 "Introduzione" in B. Meloni ed. *Famiglia meridionale senza familismo*, Meridiana Libri.
- Meloni, B. ed. 1997 *Famiglia meridionale senza familismo*, Meridiana Libri.
- Pinna, L. 1971 *La famiglia esclusiva, parentela e clientelismo in Sardegna*, Laterza.
- Pitkin, D. S. 1985 *The house that Giacomo built*, Cambridge Univ. Press.
- Putnam, R. D. 1993 *Making Democracy Work*, Princeton Univ. Press.
- Saraceno, C. 1998 *Mutamenti della famiglia e politiche sociali in Italia*, Il Mulino.
- Schneider, J. ed. 1998 *Italy's "Southern Question"*, Berg.
- 宇田川妙子「イタリヤの町社会における家族の社会・文化的意義」『民族学研究』53巻4号、一九八九年。
- Wall, R. ed. 1983 *Family forms in historic Europe*, Cambridge Univ. Press.
- Zanatta, A. L. 1997 *Le nuove famiglie*, Il Mulino.

(うだがわ たえこ・金沢大学助教授)